

近代日本人の中国意識についての一考察

——服部孔子教提唱の始点から——

丹
羽
香

〈目次〉

1. はじめに
2. 服部孔子教の焦点
3. 近代日本の倫理学と服部孔子教の基礎
4. まとめとして——服部の対中意識について

1. はじめに

一九八〇年代から九〇年代にかけて、台湾や中国、そして日本において、東洋の倫理「儒教」についての議論が盛んに行われた。その「文化ブーム」「国学ブーム」と呼ばれた時期、近代日本の中国学、また、近代日本の思想および日中の思想関係という観点から「服部孔子教」が取り上げられ、これまで主たる研究対象とされることのないなかつた服部宇之吉の思想にも新たな視点（視座）が提示され、画期的かつ大きな進展があったと言える。⁽¹⁾そして、今、その「ブーム」期における儒教研究、および議論の対象となった近現代の思想を、極めて客観的態度をもつて振り返り、新たな言葉に換えて語ろうとする動きがあるように思われる。⁽²⁾

適度に視野を広げてみると、このたびの伝統文化ブームは、実質上、全社会が社会文化的な心理の面で伝統に接する態度を転換させたという意味を有していることが分かる。今日の中国人は、まるで突然、伝統の温情に気づいたかのようであり、突然、伝統のなかに故郷の感覚を探し当てたかのようである。孔子は記号にすぎないとしても、国家漢辦が世界各地に中国語と中国文化の普及機関を設立し、「孔子学院」という名をつけているのは、少なくとも、すでに「孔子」が中国文化の代替不能なシンボルであることを認めているということである。⁽³⁾

「このたび」は今世紀に入ってから十年余りを指す。清朝末の孔子教国教化論、そして、民国初期から文革期における孔子批判と、「孔子」は近代政治学の一つの象徴的な議論の対象であった。

前述の研究業績の中で、一八六七（慶応三）年に生まれ、「明治」と歩を同じくして人生を送った服部について、「日本中国学における新儒家学派の実際上の創成者である。井上哲次郎が始めた中国古典哲学研究の『官学体制学

派』は、二〇世紀の一〇—二〇年代に服部宇之吉を経て新儒家学派となり、江戸時代の朱子学尊崇は新たな時代の孔子崇拜へと変容を遂げた。⁽⁴⁾「日本における、伝統的な漢学から近代中国学へ、また、伝統的な儒学から現代儒学へと移行する過渡期的人物だ。」⁽⁵⁾等、明確な文言によって位置づけされた。近代の幾多の学者たちに語られる、「西洋哲学の方法を支那哲学に応用されて、支那学に新生面を開拓」、「西洋のロヂックの説明に、引例を支那の古書に求めて説⁽⁶⁾く等と評される手法が、近代の中国古典研究（漢学）から、当代の中国をも視野に置く現代の中国学への移行の一助となったと言えるだろう。

しかし、服部には、別途、山根幸夫氏の「普通の漢学者とは全く異なった一面を有しており、彼の生きた当時の中国に深い関心を抱いていた⁽⁷⁾」と言うような指摘がなされていることも看過できない。山根氏はその「深い関心」について詳細を記していないが、実際、一九〇〇年、使命を持って留学に訪れたものの排外的な周囲に苦戦を強いられ、周知のように十ヶ月後には弾丸の飛び交う中を奔走した初めての中国体験⁽⁸⁾の他、研究者にはあまり取り上げられないのであるが、一九〇九年一月、長きに渡って教鞭を執った京師大学堂を離れる際の服部の言葉、「一生、支那は忘れぬ。日支の為には生涯努力する」⁽⁹⁾に象徴される、中国に対する濃厚な「愛着」と「親愛」の情がその根底にあったと言つてよいのではないだろうか。

今、中国において儒教研究ブーム期を振り返り、新たな言葉で更なる研究の動きがあるとするならば、ここに、服部一人に限つてではあるが、留意すべきと思われる点、即ち、同時代の中国研究者に比して強い主観性、そして「服部孔子教」の原点、原型があると考ええる。本稿では、これまで取り上げられることのなかった、対支文化事業で北京を訪れた服部が陳独秀に会つて直に話をしたと記されている一文、そして、若き服部——「留学」をし、自身の目で直に中国を見、義和団の乱はもちろん、京師大学堂の教習として長期にわたつて中国に滞在する以前——の一文を取り上げ、服部の対中意識および服部孔子教の原初について再考した。

2. 服部孔子教の焦点

服部が「孔子」を前面に論述し始めるのは、一九一〇年ごろからである。⁽¹⁰⁾「服部孔子教」は、中国の、いわば国体の変化と呼応、または連動して発展しているように思われるのである。

この点については既に、子安宣邦氏が『孔子及孔子教』の序文を挙げて、「この刊行時期が示すように服部の孔子教論は民国初期の孔教国教化論とその帰趨に強く動機づけられている」と表現している。そして、中国、日本のみならず、東アジアの儒教についての広く深い知識に基づいた鋭い洞察で、「いわば対抗の言説としての孔子教論」というものである。康有為の孔教国教化論が日本の近代国家としての形成に対する改革的中国からの応答であるとするならば、服部の孔子教論は近代天皇制国家日本からの中国孔子教論への再応答である。……日中の孔子教論が反応に対する再反応という相互連関的であることは、近代の学術的・思想的言説の展開がもはや一国的ではありえないことの証左でもあるだろう」と論を展開している。⁽¹¹⁾悠久の歴史を持つ中日文化交流史において、同時代性をもって直接的影響関係が確認できる思想は極めて意義深い。中国における孔子教問題は確かに、「中国とその哲学・文学・歴史を専門とした日本のいわゆる支那学者において、当代中国の変革的事態は彼らの中国観の根幹にかかわる問題としてあった」⁽¹²⁾だろう。特に、「孔子の一統主義を闡明することは支那否東洋の爲めであり、又延て世界の爲めである」⁽¹³⁾と考える服部においては更に深刻な問題として捉えられたに違いない。

殊に服部が中国における孔教国教化論議に問題としたのが「国体」である。言及する各文の筆致は、時に感情的に、時に淡々と、またある時は懇々と語るのであるが、民国の「民主共和政体」と孔子の「君主政体」に関して、譲りようのない信念を持っていたと思われる。

……漢族を黄帝の子孫と為し、禹域を神聖の域と為し、黄帝を以て新たに元を紀せんとしたる以上、共和国を上直に黄帝の時代に接せしめ、民主共和の根柢を黄帝の治体に求むること当然なるべし。夏殷を経て周に至りて成りし徳教及び之に本づきて大成せる孔子教の如きは一切排棄して用いずして方に可なるべし。然るに今日に至りて民主共和の根柢を必ず孔子に求めんとす。知らずや孔子は黄帝を取らずして、堯舜を祖述し、文帝を憲章したり。其の教えは言うまでも無く君主政体を骨子とするものなり。……

民国の学者政客等必ず民主共和の根柢を孔子に求めんとするは何故ぞ。孔子教が二千年間人心を支配し、国家の統一を保ち来りし偉大なる勢力に鑑みたるに外ならざるべし。若し此の勢力を信するにあらずば、何を苦しんで民国の根柢を必ず孔子に求めんや。既に此の勢力を信じて民国の道徳的基礎を必ず孔子教に求めんとするも、孔子教は本々と君主政体を骨子とするものなれば、求むるところを得べからざるを知らながら、なお之を求めんとせば、勢い牽強誣妄を敢えてせざるべからず。⁽¹⁴⁾

このような激しい口吻で、服部が「近時孔子教を国教と為し、孔子を教祖として天に配し（之を）祈らんとする議を立てる者」と非難の対象としているのは康有為であるが、この憤りの根本的理由は、孔子が「君主政体」を旨としているのかかわらず、「民主共和」の国家建設に孔子の教えをその論理的基軸として標榜したことにある。孔子の神格化、孔子教の宗教化は、孔子の教えが教育であり宗教の教義とは異なるとする服部には容認できないものであったことだろう。

服部に全集が編まれることはなかったが、出版されたもの以外に、さまざまな雑誌等に掲載された膨大な数の著述がある。『服部先生古稀記念論文集』、「服部宇之吉先生著述目録」(「斯文」二〇―五所収)、「服部随軒先生追悼録」(「斯文」二二―九所収)、「服部博士追悼会記事」(「斯文」二二―二所収)、「服部先生追悼録」(「漢学会雑誌」七―三所収)等に著述目録はあるものの、どれもほぼ同様で、遺漏も多い。後掲「ソクラテス」等も記載されていない

いが、それらの目録に共通した、唯一の空白、一九二四年にも埋めるものがある。「商業経済論叢」所収の「孔子教に就いて」もその一つである。⁽¹⁵⁾

近年手にしたもので、「支那が共和政体になってから既に十三年、所謂中華民国民となった現在の支那人が如何なる孔子觀を抱きつつあるかに就いて考察して見ようと思う」と記された「近代支那国民の思想潮流に就いて」がある。一九二四（大正十三年）年十二月の一文である。辛亥革命後の中国における孔子論議をまとめたものであるが、目次に「一、序論 二、尊孔派とその主張 三、妥協派と莊子 四、反孔派と大同小康論 五、国粹否定論者 六、封建政治と専制政治 七、結論」としつつ、服部は「こゝでも同様に、尊孔派の共和政体論、孔教国教化論を「明らかに孔子を誤ったもの」と言い、「その意味に於ては、余自身も又反孔派の説に同意を表する」としながら、「封建時代の人である所の孔子は、今の世に不必要であるという陳独秀」を「甚だ雑薄な議論ばかりしている男」「国粹否定論者」「西洋文化の心酔者」などと形容し、非難するのであるが、論点としているのはやはり孔子（孔子教）と中国の国体の関係である。⁽¹⁷⁾

興味深いのは、服部はここで直接、陳独秀に會つて直接、質問をしたと記していることである。⁽¹⁸⁾ そして、陳独秀からの回答が「莫然たるものであつた」と言い、文中には訴えんがばかりの文言を記す。

……吾人の聞かんとする所は、孔子が「一以てこれを貫く」と言つた根本思想たる「仁」を如何に考へているかということに存する。

……儒教の基調たる「仁」というものが今の支那国民に合うか合わぬか、すなわち必要か不必要か、ということが聞きたいのである。若しそれが不必要ならば、孔子及び儒教というものを支那から一掃するもよからう。

康有為にせよ、陳独秀にせよ、「行為の上では兎も角として支那人の言論乃至思想の枢要な部分をなすものは何

と言つても孔子の言行に帰するであろう」と断じる服部の反駁は、一九二二年からの中国共産党の緊迫した政情について、「革命以来既に十三年にもなるのに益々混乱してゆくのは如何した事か、過渡期時代の附物とは言えあまりに晚い共和政治の現状である」と続き、しいては「国民全部を人格者にするのが理想」の徳治主義の理を説き、自身の構築した近代日本の孔子教から見た「錯誤」を追及する。中国人の思想の中核には孔子の教えが連綿と流れている以上、孔子の人格の最も肝要なる仁を国民教育に活かし、国の、国民の統率を図ることを最良最適の法と主張するのである。服部はこの著述の前年に、対支文化事業として北京に図書館及び人文科学研究所設立のための準備調査、また、儒学等教授の实地調査のために、外務省および東京帝国大学から委嘱を受けて、この年、全国を回つて講演した。「這般北京大学で逢つた時」と記されているのみであるが、一九二四年前後の陳独秀に服部のこのような質問に興味はなかつたであろうし、また、服部にも当時の中国国政に関して理解しようとする言は一つとしてない。

そして、「惜しむらくはこの点を真実に考えられていないのである」と嘆息し、「併し最近支那にもポツポツこの国粹の研究（国粹と言わずに国学と云っている）が起つてきたようである。此の運動には今後我々も大いに援助して益々盛んにせねばならぬと思つている。斯くの如く進んでゆくに従つて、孔子その人の真価も社会的に判然として意義をなすようになることと信ずる次第である」と文を結ぶ。

3. 近代日本の倫理学と服部孔子教の基礎

服部の孔子教論が辛亥革命に動機づけられたものだとして、孔子に関する考えは果たして辛亥革命の前後になつたものだろうか。服部は自ら「孔子に私淑し其徒たらむことを勉めて未だ到らざる者」と称し、⁽¹⁹⁾周囲も認める孔子崇敬者であつた。⁽²⁰⁾

服部の数多の著述を見てゆくと、彼の中の孔子教が日本国内の思潮や、特に孔子教反対者の批判によってその構築を堅固にし、精微を極め、いわばそれらをあたかも原動力とするかのようにますます揺るぎない体系へと発展してゆくことが分かる。しかし、その原初的な観点は教育行政官時代の発言に既に垣間見られるのである。

一八九〇年七月、帝国大学文科哲学科に進学した服部は、西洋哲学をその専門として学ぶ。在学時に発表した論文は「列子学説一斑」(一八八八年)で、その後にも「ソクラテス」(一八九一年)、「原始信仰の梗概」(一八九二年)、「希臘哲学即古代哲学(紀元前六百年より紀元後六百年に至る)」(一八九三年)などがある一方、「老子」(一九一九一年)、「墨子年代考」(一九九六年)、「荀子年代考」(一九九六年)など、東洋哲学に関する著作が目立つ。

服部と共に漢文教科書を編み、京師大学堂で教鞭を執った法貴慶次郎が追悼会で次のように述べている。

……当時、小生は、先生に対して、専門をお変えになりますかと、伺ったことがある。之に対して、先生は、当初は、哲学史を以て立とうと思つたが、今は、稍変えたと話された。要するに、先生の御胸中には、学目的は畢竟道を求むるに在り、路を西洋に取るも、東洋に取るも、帰する所は一、但、東洋の方が、文献資料を獲るに便なりと工夫されたと信ずる。固より、岳父島田老博士の御影響も在ったであらうなれど、先生御自身に於て、亦深く考慮の上、方向御転換になつたと思ふ。⁽²⁾……

「当時」というのは、服部が、現在の京都大学の前身、第三高等中学校教務主任兼教頭として京都赴任時(一九一九四年)を指す。服部二十四―二十七歳時である。

一八九七(明治三十)年九月十五日発行の「東亜学会雑誌」第八号の巻頭にあるのは、服部の論説「中等教育に於ける倫理科教授に關して漢学者に問う」である。この一文は、第三高等中学校(第三高等中学校)を閉校し、京都帝国大学創立の基礎づくりの指令を達成し、一八九四年九月から高等師範学校(後の東京教育大学。筑波大学の

前身)において、嘉納治五郎校長を補佐して同校拡張という新たな任務に就いていた服部が、恩師濱尾新や外山正一が文部大臣を務めるに当たって、文部大臣秘書官、文部省参事官を務める(一八九七年十一月—一八九八年七月)以前のものである。「倫理科」を担当する漢学者に向けて、弱冠三十歳の服部がその妥当性を一つ一つ確かめるかのように五点に分けて問いかけた十二ページにわたるもので、それまでに書かれた哲学関連の著作とは全く異なる、いわば服部が初めて教育行政官の立場から「儒教」を講述したものである。また、その後の多くの著作に頻出する「孔子が集めて大成したところの儒教」という文言の初出であるとも言える。

東亜学会は一八九六年に発会、毎月一回「斯文学会」を開き、講演を行うとともに「東亜学会雑誌」を発行した。講演会是一般人をも受け入れたというが、その機関誌の例言には「一、本誌ハ支那を中心として東亜の学芸に關する一切の事項を載録す。一、本誌の部門ハ凡そ論説、史伝、文苑、解題、批評、雜録、彙報の七項に分つ。但事宜により改削することあるべし。一、本誌ハ匿名の文を載せず。一、本誌の読者ハ記載の事項に就き、質疑などを得其必要と認むるものハ特に之の解答を掲載することあるべし。」とあり、この一冊を見ても、論説文は他に、高瀬武次郎「両漢文学論」、文苑には三嶋毅「得所兼子先生碑」、藤澤南岳「送湖山先生帰東京序」などを載せた學術雑誌であるが、かつ、(清国)陳白「東亜連合要旨」、安井小太郎「旧幕時代学風の風潮」など時勢の論議を窺わせるものも散見される。

服部はこの「中等教育に於ける倫理科教授に關して漢学者に問ふ」において、

現時中学校に於いて、倫理科は多く漢学者の担任するところなり。而して、一方にては、倫理科を全然漢学者に担任せしむるは果たして有効なりや否を疑うもの多し。此際に於いて漢学者なるもの果して如何なる感想をか懐ける、進みて彼の疑う者の蒙を啓くの勇氣と實力とを有するか、將た退きて彼の疑うに任せて終に倫理を我の手の中より奪い去らるる時あらんも亦怪しむを要せずと覚悟するか。普通教育の諸学科は一として倫理に關係せざる

は無きが、其の中に就きては漢文科は修身道德の知識を授け、品性を陶冶するを以て目的の一部となすものなれば、漢学者にして倫理教授の任に適せずと云うこととならんには漢文科の目的を十分に達せんことも亦能わざるに至らん。漢学者たるもの、豈に奮起せざるべけんや。其れに就きて漢学者に問わんと欲するところあり。左に之を陳ぶべし。

と前置いた上で、「問う」という形を取って、自身の主張を展開する。主として、倫理科を担当する漢学者が「国史に通曉し、兼ねて世界大勢の推移、人類文化の趨勢に就きての知識あるを要すると同時に又他方にては古今東西の倫理説に就きて明瞭確實なる知識あるを要す」と、「漢学者自身の教育に大改良」をしなければならぬと述べているのであるが、儒学をもって徳育を教えてきた当時の漢学者に、時事に強く、古今東西の哲学に造詣があるべきと説く服部らしき、そして、「漢文科の目的たる品性陶冶の実効」という教育理念および国体を意識した教育構想が明確に読み取れる。

……形神二つながら旧時の儘ならんことは偶々其の教をして時運に適合せざらしむるに過ぎざれば、精神は之を取り用いて益々之を發揮すべく、而して形体衣装は時運に應じて変ずべし。此くの如く儒教の倫理説を我が国の今日に施し行わんとするに就きて取捨変通其の宜きを得ざるべからざるに、論語中庸小学の類を唯如字的に講ずるを以て倫理の能事了はるとなし。若しくは漢文科教科書中にある支那思想を我が国今日の国勢に考えて適當の取捨變通をなすを知らざるは、果たして能く教授の任を完くするものといふべきか……。

「孔子教」という語句こそないが、「堯舜以來相伝え、孔子が集めて大成したところの儒教」以外にも、「宗教的の意味を帯びず」「儒教によりて達し得べき安心立命は天人の關係を以て根柢となす」などが各所に記され、こ

の後、留学を経て、京師大学堂での教授を終え、帰国して著す「孔子の集大成」以降の、「孔子の教え」を前面に出して、教育と社会との関係から「仁義忠孝」を説く『東洋倫理綱要』『孔子及孔子教』その他の著作に並ぶ文言が挙げられ、また、「本邦現在の国勢を考え……国家の富強を謀るは最も急要の事」で、「此の進取勇往の趨勢に適すべき教を施さん」等の国体に関係する文言が書き連ねられている。

全国規模に広がる自由民権運動の最中、一八七九年、道徳の学は孔子を主とすると明言された教学聖旨内示によって、「仁義忠孝を明らかにして」「君臣父子の大義を」知る、儒教主義的皇国思想の説かれる教場に服部は学んだであろう。その十年後に大日本国憲法を發布した明治政府は、殖産興業のみならず富国強兵をスローガンに国力の増強、国民の意志統率を目指すとともに、翌年に教育ニ關スル勅語（教育勅語）を發布し、中等教育、即ち、修業年限四年の小学校卒業後に進学する尋常中学校、高等女学校、尋常師範学校の充実を図る。教育者の養成に文部官や高等教育機関に勤めるものを全国に派遣して講演会を設けたり、夏季講習会を開いて、免許状の取得や上級の免許のためのセミナーが催すのは、一八九七年の師範教育令による。⁽²²⁾

「中等教育に於ける」の一文はそれまでの著述とは一線を画すもので、「倫理教授の任に当るべき者には、漢学の学力以外に於て必要なる知識甚だ多し」「漢学者たるの故を以て、倫理教授の任に当るに適すと思わば、是れ大なる誤なるべし」との主張を旨とし、現状の倫理科教授の現場に一石を投じたもので、未だ天皇制を扶翼する孔子教の構築には至っていないものの、論説は国政の時局に及び、国内の農工業をも儒教からめて論述するなど、その思想の背景に国の繁栄と教育理念との関係が色濃く窺われ、服部孔子教の原初的一文、源流もしくはその雛型と見てよいだろう。康有為らの孔教上奏は、この一文発表の翌年一八九八年、服部が「漢学研究の爲め滿四年間清国へ留学を命ず、但留学期限内凡二箇年間教授及研究法攻究の爲め独国へも留学すべし」との官命を受けるのが一八九九年である。

在学中、時に外山正一の講義の唯一の受講者であったという服部は、一八九二（明治二十五）年に『論理学』⁽²³⁾

翌々年『心理学』を出版するが、「中等教育に於ける」の前年に『倫理学』を著している。

教育と倫理学との干係彼れの如く密なるものなれば、教育の学に志し教育の事に従ふ者に在りては、倫理学に就きて一応の知識だになきとは、如何ぞ其の志業を果すことを得べけん。

本邦現行の教育制度に在りては、修身(倫理)の科は特に一科目として設けられ、然かも諸学科中最重要なものとせらるゝも、其の實際を察すれば多くは論語中庸の類を講ずるのみにて漢文科と径庭なく、或は西洋修身書の翻訳によりて権利義務を喋々し、倫理教場は法律の討論会上たるかと疑われしは、数年前までの倫理教授の実況なりき。然るに聖詔煥発するに及びては……⁽²⁴⁾

「教育とは何ぞ……此の目的を定むるものは倫理学なり」で始まるその序論はあたかも「中等教育に於ける」の骨子そのもので、また、第二章「事実的照準論」の節、自己に対する道、父母兄弟等に対する道、私友官長等に対する道、一般世人に対する道、君王国家に対する道等、生涯にわたって説く服部の「孔子教」の基礎が明確に読み取れるとともに、その思想の根底が既に形成されていることが確信できまた、求めに応じてテキストを執筆する中に生まれた(まとまった)のが服部孔子教の基礎だったと言える。

更に言えば、一八八七(明治二十年)年、服部が帝国大学文科哲学科に入学した年、大西祝が「孔子教」⁽²⁵⁾を著している。知る限りにおいて「孔子教」という名称で書かれた最も早い著作である。「諸家の中、父が最も私淑したのは文科大学長外山博士及び後に岳父となる島田博士、哲学科の先輩で最も畏敬したのは大西祝博士のようである」⁽²⁶⁾という息子武の談によれば、一年先輩のこの大西の著作を服部が読まなかったとは思われない。この二十頁ほどの短文は、釈迦やマホメット、イエス等諸家の思想に触れ、孔子の仁をジョージ・アーネスト・モリソンやトーマス・カーライル等の言を用いながら、いわば西洋哲学の方法で孔子の仁を解説したもので、服部「孔子教」の発

想の原点とも言うべきものではないかと考へる。

4. まとめとして——服部の対中意識について

前述の「中等教育に於ける」が世に問われた一八九七年、服部が関与した第三高等学校（第三高等中学校）を前身に京都帝国大学が創立され、一九〇七年、服部と共に義和団による戦火を逃れた狩野直喜のもとに「支那学云」が設立され、近代日本に西洋でいうシノロジーが産声をあげる。そして、京都学派中心に一九二〇年、その「支那学社」から機関誌「支那学」が刊行され、東大の「官学体制学派」と類を別にし、儒教も孔子も客観的に捉える次世代の学者を輩出してゆく。

しかしながら、服部もまた、教育という観点以外に研究という観点からも現況の日本中国学（漢学）を批判し、当代の中国にも目を向けるべきという主張していた。

忌憚なく云へば、漢学を修むる者は先秦の經典左国史漢と云ふ様な古色蒼然たるものに力を尽くして、現代の支那には余り注意を置かない。此等の人には今日支那で行はるゝ手紙はむづかしいかも知らぬ。況んや言語の出来るものは殆どない。如斯意味では漢学は衰へないとは云はれない。而して支那の時文に通ずる人は漢学者とは云はれない。又哲学社会学の方面より支那の研究に従事しても漢学者とは云はれない。私は古代の所謂漢文と時文と哲学社会学の研究とは鼎足の勢をなして進むべきものと思はれる。例へば自分を修めた者が支那の風俗人情等を研究し、又社会学哲学等の方面の人時文を通じて今の支那を研究する事の如きは、目下の急務である。私の云ふ支那学は此等三方面の研究を総称するものである。⁽²⁷⁾

「先秦の經典左国史漢と言う様な古色蒼然たるものに力を尽して、現代の支那には余り注意を置かない」者は「漢学者とは言われない」と言い、「古代の所謂漢文と時文と哲学社会学の研究と鼎足の勢をなして」「今の支那を研究する事」が「私の言う支那学」と教示した服部の対中意識には、単に唯々諾々と時流に合わせていたというのではない服部自身の強い意識がある。そして、「私は子供の時から父がよく『支那学』という言い方を口にしていたのをおぼえている。……『支那学』というこの言い方に、何か気負うたある大きな構想をひそめた心情が働いていたように思えてならない。……今日でいう『地域』学確立の要請も……」⁽²⁸⁾等でも分かるように、その思想は教育の現場で後世に継承されていったのである。

それが中国であれ日本であれ、服部の孔子教は「国体」と表裏一体の観念で、極めて体制に近い経歴を歩んだ服部の思想を政治学、国体学といった方面から見ること、と可能かもしれないが、実際、「昨年中秋後支那湖北省武昌にて革命騒ぎが起つて後、……終に袖手傍観すること、となつた。然し自分は竊に支那にして民主共和政体に変せんか、支那の人心に大なる變動を生じ、延いて我が国にも影響するに至る無きかを憂へた」⁽²⁹⁾といった文言には、隣国中国に対して単に国益のみからの関心とは言い難い、強い情念が見え隠れしているのではないだろうか。

殊に遺憾な(こと)は日本人の清国に対する知識欠乏である。書物其他清国を知るに便宜がないから、支那を理解するは困難であるが、是に心を用ゐて貰いたく思ふ。清国へ行く者の多数は、支那の新記事を見て事実を確めず、其儘信ずる故に誤解が多い、是等人々は片言雙語に耳を傾け、直に速断するから自然誤解を生するのである。私は日本の有力者が多く渡清して、少くとも二箇月間位は滞在して、着実に観察もし調査もしたならば、清国を理解し我国との交情を温かならしむるに於て、少なからぬ利益があるだらうと思ふ。

其処で日本人が清国を理解する様になり、また清国人も社交に於て日本を正解する様になつたならば、東洋の二大帝国は常に円満なる交際を保つ(一)とを得て、永遠に平和を維持する(二)とが出来、世界の大勢に従て益

す進歩発達する(二)とが出来ると思ふ。⁽³⁰⁾

「服部孔子教」という「思想」の基軸が明治二十年代の国家主義的風紀の中に形成された、とのみの解釈では、近代日本人の中国意識の理解にはならないであろう。確かに、服部は「時代の申し子」であったかもしれないが、「孔子の教が我が邦に大なる善影響を与えましたのも、大義名分を明らかにしたる孔子の教義によるは勿論であります、又孔子の人格の我邦人心に及ぼしたる影響の然らしむるものが最も大なるものであると自分は信ずるのである」⁽³¹⁾のように、孔子を生んだ中国尊崇の観念を常に表現している。そこに、子安氏が「一等国から来た御用学者」と形容するように、服部は「誤れる中国」を教導する使命をもって臨んだことは確かである。本稿では、孔子を信奉する服部の、中国に対する思い入れを注視したが、服部の晩年における言論に容認の余地があるとする意図はない。しかしながら、西洋哲学を学び、自身の観念の根底にある東洋の哲理を進展させ、日本中国学成立の礎を積極的に築いた一人であり、近代中国の行方真摯に関心を寄せた一人である。

服部孔子教は明らかに、近代の日本が目指した国体の下、意識的、意図的に構築された大衆教化のテキストである。その基本的思想の概要、発想の動機は民国成立前後を待たず、彼が初めて中国を訪れる以前にすでに形成されていたと考えられ、教導の対象は中国および中国人に限られたものではなかった。それは、日本人に当然のように潜在する自明の前提「日本儒教」、および明治政府が取った近代化方針としての教育観念を基礎に、当時の日本の国体観念に意識的無意識的に連動し、また、中国の新文化運動や辛亥革命などの変革に呼应して発展、明確化されていったものである。

従来、国内においては、中国古典文学もしくは中国古典哲学の研究者として分類されることが一般的である服部宇之吉は、孔子教をもってイデオロギーとし、啓蒙を目指した一人の近代日本人でもあり、近代日本の中国学形成期、国の対中政策と不可分であった日本中国学および近代日本人の一表象とも言えるであろう。

〔注〕

(1) 思想研究としては、陳瑋芬氏、劉岳兵氏、子安宣邦氏などによって、八〇年代以降、数多くの優れた論文が発表されている。京師大学堂等教育関連、また対支文化事業等については山根幸夫氏、大塚豊氏、阿部洋氏などに詳細な研究成果がある。

(2) 「現代思想」(青土社)二〇一四年三月号「特集——いまなぜ儒教か」所収。譚仁岸「儒学の『創造的転化』——八〇年代中国の近代化問題と関連して」、張志強「伝統と現代中国——最近一〇年来の中国国内における伝統復興現象の社会文化的文脈に関する分析」には、前世紀における中国での儒教研究が盛んに行われた経緯や現在の研究状況などが詳細に記されている。

(3) 同右。一四二頁

(4) 嚴紹鏗『日本中国学史』江西人民出版社、一九九一年、四四一頁。

(5) 劉岳兵『日本近代儒学研究』商務出版社、二〇〇三年、一九七頁。

(6) 「服部随軒先生追悼録」(『斯文』二二の一二、一九三九年、斯文会) 五九頁。高田真治弔辞。

(7) 山根幸夫『近代中国のなかの日本人』(研文出版、一九九四年)。初出は、「服部宇之吉と中国」(早稲田大学社会科学研究所編『社会科学討究』三四の二、一九八八年十二月、二五五頁)。子安氏は「清朝崩壊後の中国への『孔子教』に仮託した複雑な思い入れ」と表現している(『儒教の成立』と『儒教の本質』一九九六年、「江戸の思想」三、ペリカン社)。

(8) 柴五郎他著・大山梓編『北京籠城記』(平凡社)、「列伝 服部宇之吉」(東亜同文会編『続対支回顧録』)所収。原書房、一九七三年)、他「先生自述事略」(『服部先生記念会誌』)所収。一九三二年)、「服部先生自叙」(『服部先生古稀記念論文集』)所収。一九三六年)、「服部先生記念祝賀会」(『斯文』一八の六所収。一九三六年六月)、服部武「北京大学堂と父」(『東京大学漢学会雑誌』)所収、「先学を語る」(『東方学』四六所収。一九七三年八月)等参照。

(9) 法貴慶次郎「服部博士追悼会記事」五九頁。

(10) 一九一〇年「支那人の見たる」孔夫子」(『日本及日本人』五三一)、同年「孔子の集大成」(『漢学』一の一・三・四)、一九一一年「孔夫子」(『弘道』一三〇)、同年「支那思想と現代思想」(『哲学雑誌』二六の二九五)、同年

「支那に於ける孔子尊崇」(「東亜研究」一の一)、一九二二年「孔子と老墨二子」(「東亜の光」七の二)、一九一三年「春秋公羊学の妄を弁ず」(「東亜研究」三)など。また、服部の著作物の中には種々の講演会の口述筆記があるが、このころにはその抄録が新聞にも多く載せられている。

(11) 「本書収むるところの論文十有余論は、或は孔子の人格の偉大を説き、或は支那人の孔子の教義を誤解する所以を論ずる等皆孔子教の真義を闡明するにあらざるは無し」一九一七年、京文社。

(12) 子安宣邦「近代中国と日本と孔子教——孔教国教化問題と中国認識」(「環」Vol. 十二所収) 四六〇～四七七頁。陳璋芬氏は「その『孔子教』論は、中国における儒教のあり方への反発から成立した」と表現している(「服部宇之吉の『孔子教』論——その『儒教非宗教』説・『易姓革命』説・及び『王道立国』説を中心に」二〇〇一年、「季刊日本思想史」第五九号所収)。

(13) 「支那に於ける孔子尊崇」一〇頁。「孔子誕辰会席上に於ける演説の大意を記述し稍々増損せるもの」として、一九一一年十二月の「東亜研究(漢学改題)」第一巻第一号(通篇第十六号、東亜学術研究会編)に載せられたものだが、冒頭は「自分は支那に在る間に、支那国民が孔子に対する態度等に就きましては特に注意を払いました。段々観察致しまして自分の深く感じましたことは、支那の統一と孔子との関係であります。……即ち支那の統一を保つ所以のものは孔子の教である。而して孔子の教が此くまで大なる勢力有る所以のものは、孔子の人格の然らしむるところである。即ち孔子の人格が支那を統一して居るのであります」に始まり、主として、義和団の乱以降の、主として一九〇六(光緒三十二年)年前後(「教育宗旨」上諭前後)の教育政策および当時の清国庶民の孔子尊崇の現状を細かに解説している。中国の統一と孔子については、その他多くの著作に書かれている。服部の代表作『東洋倫理綱要』(一九一六年、京文社)にも「支那国家の統一は、孔子を以て唯一の中心点と為す」とある。ここには正式に「孔子教」の項目がある。

(14) 「孔子教に関する支那人の誣妄を弁ず」(「東亜研究」三の一)所収。一九一四年二月、一～二頁、東亜研究会。「近著の支那雑誌に孔子及び孔子教に関する妄説あり、因て前号所載道家修養法の続稿を次号に譲り、此一篇を草す」と前置きして書かれた、激しい論調の一文である。「今や支那人は所有牽強誣妄を恣にし孔子及び孔子教を民主共和に伝会せんとす、我邦の学者或は一笑に付して顧みず、或は過渡時代の常として意に介せず、吾人は則ち然かく冷静に看過すること能はず、彼益々牽強誣妄を逞しくせば、我益々論説弁難を盛んにし、孔子教の真義を闡明するを以て吾人孔子の徒

たる者の義務なりと信す、唯、之を存するの名を仮りて牽強誣妄を恣にするに至りては吾人之を許すこと能はず、鼓を鳴して聖人を誣いるの罪を問はざれば措かざるなり（九頁）。他に「支那に於ける道德の危機（孔子祀典の存廢問題等）」（『東亜研究』二の一一所収。一九二二年十二月）、「春秋公羊学の妄を弁ず」（『東亜研究』三の六所収。一九二三年六月）等。

(15) 名古屋高等商業学校研究室編集「孔子教に就いて」（『商業経済論叢』所収。實文館）

(16) 「中央佛教」（八の一三）所収。中央仏教社。一七頁。

(17) 同様に「支那が民主共和国となりて以来十三年、其の思想界に於ける忠臣問題は『サイエンスとデモクラシー』なり」とある。「中華民国と孔子教」の発行は一九二五年一月。「東亜の光」二〇の一所収。

(18) 服部は「大正十三年春」としている（『隨筆三則』『文藝春秋』一六の六所収。一九三八年四月）。他、江上波夫『東洋学の系譜』九二頁等参照。

(19) 「孔子の集大成」、東亜學術研究会編「漢学」第一卷第一号所収。「孔子の集大成」は「漢学」一の一・三・四（一九一〇年五月七月八月に載せられた労作で、服部が孔子教を紐解いた論説文）。

(20) 吉川幸次郎「折々の人」

(21) 前掲「服部随軒先生追悼録」四八頁。服部の「専門」については、江上波夫『東洋学の系譜』にも「哲学科出身で、西洋哲学やその方法論などに詳しくなかったのに、どうしてその方面の業績が少なかったか、と私見を記しつつ、「生前何度か会って教えを受け話もしたのだが、その点を聞きそびれてしまったことが返す返すも残念である」と記されている。服部自身は後に「自家の専門が支那哲学に在る」（『漢学』「孔子の集大成」一九一〇年）と語っている。

(22) 他、明治二十四年から続いた「教育と宗教の衝突論争」が時代背景として挙げられる。

(23) 「懐旧雑俎」（斯文会「斯文」一六の七）等参照。『中等論理学』（一八九二年。富山房）、『心理学』（一八九四年。富山房）、『倫理学』（一八九六年。金港堂書籍。一八九九年に文体を換えた改訂版があるが、そこに記された前言をみると、初版が教員文庫の一冊であると分かる）。

(24) 『倫理学』一〇十九頁。

(25) 『大西博士全集』第五卷（警醒社、一九〇四年）所収。

- (26) 『東方学』四六「先学を語る」一九七三年。二〇頁。「帝国大学総長加藤弘之博士より授けられた卒業証書によると、在学中主に哲学史・論理学・心理学・審美学をブッセ氏に、史学をリース氏に、ドイツ語をフロレンツ博士などに、ラテン語を神田乃武氏に、東洋哲学及び漢文を教授島田重礼博士や南摩綱紀氏に、社会心理学を外山正一博士に、精神物理学を元良勇次郎氏に学び、他に動物学・生理学・精神病学なども修めた。以上諸家の中、父が最も私淑したのは文科大学長外山博士及び後に岳父となる島田博士、哲学科の先輩で最も畏敬したのは大西祝博士のようである」
- (27) 「新人」一一の三「支那学に関する意見」一九二〇年三月 四六頁。
- (28) 藤塚明直「服部宇之吉先生と父藤塚隣」「斯文」五八所収。一九六九年十月。藤塚隣は服部が一九二三年に創設の任務を負った京城帝国大学（朝鮮帝国大学）に送った弟子。
- (29) 「支那に於ける道德の危機（孔子折典の存廢問題等）」一九二二年十一月、「東亜研究」二の一一所収、東亜学術研究会。一二頁。
- (30) 「太陽」(一一の二・一三。一九〇六年九・十月)所収「清国の覚醒と排外思想」七九〜八〇頁。他、「清国事変ノ裏面観」(一九二二年五月「国家学会雑誌」第参百四号第二十六卷第六号、九七〜一二八頁。国家学会編、東京大学大学院法学政治学研究所刊行)等。
- (31) 「日本文化の支那に及ぼせる影響」(「明治聖徳記念学会紀要一の三」)所収、一九一四年十月」など複数あるが、ここでは「支那に於ける孔子尊崇」二頁の文言を引用した。